

博士学位請求論文審査報告

2022年2月9日

申請者：奈倉 京子（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程 SD191018）

論文題目：中国北西部における知的障害者とその家族の「新しい社会性」
—中間的領域/組織をめぐるエスノグラフィー—

論文審査委員

小林 多寿子

佐藤 仁史

杉野 昭博(東京都立大学)

1. 概要

本論文は、中国の障害者とその家族の「新しい社会性」とは何かという問いのもとに、2000年代以降の中国のポスト社会主義的状況が、障害者とその家族にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることをめざしたものである。従来の中国の障害者研究は、欧米の「障害の社会モデル」への到達を理想とするパターンリスティックな観点から障害者政策への提言に主眼がおかれてきたのに対して、本研究は、中国独自の社会主義によって形成された社会に生きる個々の障害者とその家族の生の営みに焦点を当てて、個人と家族、家族と社会/国家の結びつきのあり方を解明している。

本論文のキーワードである「新しい社会性」とは、中国の社会学者閻雲祥が提起した概念であり、「中国社会の個人化」が進むなかで、社会活動をとおして互いに影響を与えあう個人の結びつきの新しいありかたを指している。筆者は、閻の議論が欧米の近代化論に立脚した理論的考察に留まっており、個人の間で結ばれる人間関係や組織の性質に関する実証的研究に基づくものではないと批判したうえで、2000年代以降の中国の社会状況において、個人化をめぐる「新しい社会性」が生まれていることに着目している。

本論文の特徴は、障害者家族にとっての「新しい社会性」を考えるために、政府の障害認識と障害者政策の変遷および中国独自の「社会工作」すなわち中国的ソーシャルワークの特徴をふまえたうえで、二つの観点から実証的な検討をしているところにある。一つめの観点は、個人/家族と国家の中間的領域における組織の実際とその役割を考察すること、いま一つの観点は、知的障害者家族の生活実態を個々の生の営みを描きだすことである。甘肅省蘭州市における現地調査にもとづいてこれら二つの観点を実証的に検討し、2部構成で論じている。

一つめの観点における個人/家族と国家の中間的領域における組織とは、「機構」とよばれる非営利の民間組織であり、公式には「慈善組織」とも称される。著者は、蘭州市における知的障害児教育支援組織等で現地調査をおこない、関係者へのインタビュー調査をもとに3つのタイプの「機構」を検討して、知的障害者にかかわる組織化の実態をあきらかにしている。

もう一つの観点である知的障害者家族調査では、知的障害児教育支援センターにかかわる計12名の保護者へインタビュー調査を実施し、とくに4人のライフストーリー分析をもとに四つの知的障害者家族のケースをエスノグラフィックな記述で描いている。知的障害者家族の日常的ケアの実際、支援組織とのつながりや家族外の他者とのかかわりのありようを描くことで、障害者家族と中間的領域の関係性を考察している。

これら二つの考察をもとに、閻が「中国社会の個人化」論で社会が個人を受容するメカニズムの発達の遅れにより個人が家族や私的關係に戻っていかざるをえないと指摘したことを筆者は「家族回帰」ととらえ、障害者家族における実態が「家族回帰」なのか、それとも家族を超えた新たな社会関係の構築へ向っているのかを検討している。

その結果、障害者家族は、閉鎖的な「家族回帰」ではなく、「機構」にかかわることによって専門家や支援者組織、当事者同士の横のつながりの機会を得て、新たな社会関係を構築しており、そこに障害者家族の「新しい社会性」をみだしている。さらに、障害者家族は、中間的領域の介在を経て外へ開放されつつある多面性のある新たな「家族回帰」へと進展していることもあきらかにした。

2. 本論文の成果と問題点

本論文の成果としてつぎの三つの点をあげることができる。

第一に、障害者福祉/障害学研究としての意義である。現代中国の障害者福祉をめぐる現況を国家の障害者福祉政策の経緯もふまえつつ6年にわたる綿密な現地調査にもとづいて、知的障害者関連組織と知的障害者家族をめぐる実態を実証的にあきらかにした意義は大きい。知的障害児の親の経験を描きだしたことは、障害児親研究への重要な寄与となるだろう。とくに祖父母の語りは、障害をもった孫のケアにたずさわる祖父母世代の実際を顕在化させて、中国特有の家族主義的な障害者ケアの世代問題も浮き彫りにし、障害児の母親のキャリア問題とあわせて、障害児家族研究にとって新たな研究視点を提起している。

第二に、方法論的意義があげられる。甘肅省蘭州市において障害者家族の協力を得て現地でのフィールドワークを重ねて障害者家族の現在の生の実態をとらえることができた。障害者家族へのインタビュー調査をもとにしたライフストーリー分析では、とくに人生全体への視野を示しつつ障害者家族の日常に寄り添い、オーラルな語りを重視した丹念な描き方が効果的であり、障害者家族の生活の細部とともに世代間差異も浮かびあがらせている。2020年初め以降、コロナ禍による現地調査の困難に直面したものの、それ以前の現地調査の蓄積を生かして豊かで充実した調査データを議論の基盤することができている。障害者家族への接近の難しさも克服し、本論文は対象に深く入り込んで丁寧に語りを集めた意欲的な秀作と評価される。

第三に、現代中国社会研究としての意義をあげることができる。知的障害者をめぐる実態

調査をとおしてとらえられた中国の社会工すなわち障害者福祉にかかわるソーシャルワークの現状、そして中間的領域としての「機構」は、国家の政策に協調する面をもちながらも自らの理念のもとで能動的に障害者とその家族の支援を実践していることがみいだされた。障害者政策において、国がいまだに障害者の家族扶養を前提とし「社会の力」が補助となることを政策理念としている現況下で、障害者家族が家族の外の専門家や支援者となつたりうる「機構」は、従来になかった個人間の関係性や社会的弱者の包摂をめぐる公共性を生みだしており、障害者家族をとおして現代中国社会の変容を明瞭に示す結果となっている。2000年代以降の中国社会における障害者家族の困難と生の営みを福祉政策展開との関連のなかで如実に描きだせたことは、本論文の発見的成果である。

以上の他にも本論文の成果は少なくないが、残された課題がないわけではない。以下に二つの点をあげたい。

一つは、障害学研究の文脈からの課題である。知的障害当事者である子どもの状況についての記述が薄い点が惜まれる。障害学研究からみると、障害当事者の立場にたった視点をとりに入れることが要請される。本研究は、中国の障害者家族研究として先駆的意義があると評価されるものの障害者の親だけでなく障害当事者の状況についての記述がもう少しあったなら、障害学研究の成果としてのより貢献が増したであろう。

もう一つは、中国社会研究への視点をめぐる課題である。「障害の社会モデル」が国連の障害者権利条約に由来していることをふまえると、中国社会における障害者政策や障害の認識論などへの目配りとともに国際的な比較の視点も求められるであろう。少なくとも日本人研究者の視点から議論する際の基盤となる日本の障害研究で得られている知見も動員することによって中国社会における障害研究の特徴がより鮮明に浮かびあがると考えられる。国家指導による中国モデルという西洋化に頼らず障害者福祉モデルを構築していこうとする現代中国において、海外から研究者はいかなる貢献ができるのかという研究者としての立ち位置も合わせて、今後の課題であろう。

これらの点は、本論文でもっとも評価される蘭州市における知的障害者支援組織の綿密な調査と障害者家族の豊かな経験の語りをもとにした中国社会の「新しい社会性」研究を深めるというオリジナルな試みを活かすためにもなお一層の検討が求められるところである。ただ、これらの点は、本論文の学位論文としての水準を損なうものではなく、筆者自身も重々自覚しており、今後のさらなる研究において克服されていくことが十分に期待できるものである。

3 最終試験の結果の要旨

2022年1月5日、学位請求論文提出者・奈倉京子氏の論文についての最終試験をおこなった。本試験において、審査委員が、提出論文「中国北西部における知的障害者とその家族の「新しい社会性」—中間的領域/組織をめぐるエスノグラフィー—」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分な説明を与えた。よって、審査委員一同は、奈倉京子氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(社会学)の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。